

三

此處でこの芝居には、テーマ（お舟の戀の）生一本に加へて、——それは成就した。唯成就したと見る間に、——複雑な修飾が一時に湧き起つて來たのです。うてなのあたりを憚りつゝ呼んだ「義峯」の名。彼の懐中から現れた「白旗」。それに加へて矢庭に花道に現出したグロテスクの怪物「六藏」と。

然し説明はこの一々には少しも必要ありません。唯虚心に運びとその現はすところを見ておれば、疑問は片ツぱしから納得が付いて行く。——同時に事件は謎が濃くなり、主役の性格は深く立體的となり、従つて美感は高潮に達して行く。

一體この劇の「うてな」は大切な端役の典型です。劇をさらふよりは劇にさらはれる、つまり性格なき誠實な劇の段取の一つのくさびになつてゐる。彼女が「居る」と云ふこと、たまく影で「しやく」を起す事、「義峰」の名を云ふ事、旗の威徳を云ふ事、……一つく劇には主要の契點となり、然かもそれ等が一つもこの役のもうけにはならない、といふのは、彼女は彼女それ自

身「劇」にもうけられつくしてゐるからです。一刻もその人が居ないと云ふわけにはいかない、然し居てもそれとしては更に光らない、端役と云ふそのものゝ持味に徹した美事な端役。

一方「六藏」といふ役は、端役うてながテーマにからめて手順よく投げかける謎——「義峰」——「御旗」——を一氣に見る者の前へ解きはなして、然も更に密度なり色、情操を濃くする、舊劇獨得のグロテスクの怪物だ。彼は卑賤にいやらしく、然し憎氣はなく、下司にこの謎を——つまりその振りや段取りで——解けば解く程、後に頓兵衛の「悪」の美しさはいよく加はり、彼「六藏」は大いに骨を折つて、然し劇の主人役へ全然殉死の奉公をする。つまり脇役のひねりにひねつた獨得の傀儡です。「筋」を具象化しその「説明」を美化した不思議な一つの役からである。勘彌はよくそれを、持役を呑み込んで演了せたと思ふ。

四

怪物六藏は花道にけたましく飛び出すと、やがてその臭味を八方に散らして渡守の家へ近づき、フト格子越しに家の中を見る。と、正座に旗が掛つて、見なれぬ男女がお舟と同座にゐます。

彼はしばらく目をすゑて家内の様子を見てみます。——中ではその間に義峰はうやくしく旗を藏ひ、うてなを連れて一先づ離れの間へ退く。——と外の六蔵はそこで大いに欣びと、同時に焦慮を感じ迷ひ初めた。

彼は凡て之れ等をあくどく異臭を發する振りと、手順のねばりで、鬱陶しく見物の前につまり「種明し」するのだが、これは大變なものを見付けた。然し己れ一人で獲物をせしめて了はうか如何しやう。順は「親方」に云ふのが本當だが、すると手柄をとられて了ふ。これは一つ己れ一人で今踏み込むに限る……彼は頭をふり廻し、舌を出し、臍も覗かんばかりに身をくねらせて、家の中へ威丈高にどなり込みます。新田の落人見付けた、捕まへてしまふ、と云ふ。

そこには今はお舟一人が居るのです。お舟はなほしきりに男、義峰を戀しく思つてゐるが、そこへ藪から棒に變な男、よく見ると下人六蔵に飛び込まれたので、當惑して所置に窮してしまひます。しきりにあの人は困らせずにくれとたのむ。六蔵は然しいつかなきかない。——さそくに お舟は氣が付いて、それなら今まで私にお前の時々云つた事は、あれは皆うそかとツンと横を向いてしまひます。この一言に六蔵はタチ／＼となつて、なにさう云ふわけではないが、と、つまりだしぬけに飛車取り王手を食つたかたちです。見物は餘りに有り想な彼の日頃をそこに掲げられ、

そのにほひをかぐので、思はず苦笑してどうなるか、成行に滑稽を感じて見てゐる。六蔵は困つてそこに力ぬけして了ひますが、頭がグラグラになる。お舟はすかさずその立往生の六蔵に近寄つて、色よい素振りを見せ、男のひさをツネつてぢれたりすねたりして見せる。六蔵はボーッと身心フラ／＼になり、やがてうれしくなり、落人もへちまもなくなくなり、しまひには奇聲を發し頭を叩いて「コイツはえゝわ／＼」と有頂天のはねまはりを初め、グンナリとして、フラ／＼體よくその場を外へ出されてしまふ。

見物はその間不取敢アハアハ笑つて見てゐるが、六蔵が行つて了ふと、しかし此の「六蔵」と云ふ仕掛けは實は他愛ない劇の詐術に過ぎないので、彼が揚幕へ消えれば、もう笑ひも消え去る、——と、初めてそこで此の下司笑ひの幽霊「六蔵」が陽氣に見せて然しながら實は陰氣に、ぬけ目なく劇全體へ涉つてかけて行つた、一つのテーマのわなに心付きます。それは恐らく劇中のお舟も乙女心に今は氣が付いてゐる悲しいことだが、彼女の愛する男は、その正體は今此の邊一體でつけつまはしつ探索されてゐる新田の落人だと云ふ心がかりのことです。

舞臺は静かになり、お舟は邪魔ものを拂つて一安堵してゐる。彼女は自分の心を見つめるが、いつそもう一度よく願ひに行かうと、戀心を新たにして、今は「落人」、義峰のゐる離れの間へ

向ひます。

彼女は愈々純情一途に燃える。即ちテーマは、それ故に初めの素純からは今やより一步複雑な悲劇の芽の方へどうも傾きかける工合で、心もとない、いぢらしい氣合がよどもる。

五

舞臺は一時氣味わるく空虚となる。床の大夫がみすから顯はれる。鐘が一つなります。

——と、ゴソ／＼と無人の舞臺の一隅の小さな笹むらが怪く動いて、そこから押分けて緒顔白髪の渡守頼兵衛が無言に出て來ます。凄い月の出の様に。

彼はゆらくと舞臺一隅から湧き出すと、牡獅子の様に悠然と、ある殺氣を含んで、一舉一動に氣をくばる。舞臺と観客全體を露感せずには止まない工合です。——事件が何となく大變深くなつた。

彼は花道のつけ根で呼子を吹いて手下を呼びます。と、下人の六藏が再び花道から音につれて出て來る。先刻より餘程變つて眞顔になつてゐます。と云ふのが舞臺は今「頼兵衛」に統べられ、即

ち前の「六藏」にはその空氣は吸へない。——頼兵衛は彼を招いて何かその耳にさゝやく。六藏はうなづき、急いで向ふへかけて行つて了ふ。

どうやら油断もすきもない不安があたりに漲つて今にも張ち切れさうである。

頼兵衛はそれから門口にある我家の納屋へそつとはひつて、一旦姿が見物から見えなくなりまして、家の内部の壁面にギラリと光る一閃の物があつて、それは蛇の様に壁をギリギリと引きまはし、つまり納屋から頼兵衛が刀でそこをくり抜いてゐるのです。やがてポツカリとギザギザの眞な大穴がそこに出來る。そこから頼兵衛が拔身を手に持つて室内へスツトあらはれます。

室内は眞の間だ。頼兵衛はギラ／＼長刀片手にさぐつて、室を下手から上手へ一足々々横切る——途中で思はず煙草盆にけつまづき、手に取り上げて、「怒りながらそつと置く。」やがて片わきの障子の閉つた一室へ忍ぶ。そこで舞臺がまはる。

○

一面白作りの喪服の様な舞臺です。すつかり障子を閉て切つた床の高い家が一軒と、つゞいてやぐらがあつて、太鼓を吊つてある。と見ると下手から忍びの頼兵衛が黄金蟲の様に光つてあらはれる。肌ぬぎになつて、黒地に銀模様の大きな筒袖の下着がからだを堅固にしてゐます。——彼

は白作りの家の高い床下へもぐり込み、そこは一面眞黒の闇の上に唯床の井桁だけ大きくあざやかに浮かしてあるところで、頓兵衛はその暗黒の中へ一途にうづくまると、拔身をかざして、いきなりかうと思ふところを力任せに突き通す。

忽ち眞上の一室に當つて女の悲鳴が聞えます。一時に閉て切つた障子がバタ／＼と一齊にはぶされてそこにはあけに染んだ娘お舟が身をもがいてあらはれる。頓兵衛はすぐ様その場へかけ上つて意外におどろく。行き、來り、光る刃をかまへてそれがカチャカチャと絶えず鳴り、その顔、その聲。——正にこれ等が、そこには舊劇の靈があつてそのまゝこの生きた姿にのり移つてゐると云つていゝ、動く幻影。

娘はこゝで手負になつてから、彼女は一層そのテーマに徹して純情無垢となり、數分間に數年を閲した様な、性格の深さをそのまゝ示してゐます。着衣もそれにふさはしく白地に細かい黒の點々の、そこに悲哀の織込まれた一種の模様變つて、父の胸をなげき、「かゝさんが御さんしたら仕様ようもあらうもの」と悲しく恨みます。

男は先刻自分が事情を話してこの裏手から舟に乗せてもう逃がしてやつたと頓兵衛に語る。頓兵衛は齒を食ひしぱり、地圖太を踏んで「えゝ、武田様へ約束の顔が立たネエ」と無念がります。

まつはる手負の娘をむけに突き倒す。ト、その場をおりてかけ出で、そこに矢口渡と書いてある四角の棒杭が立ててあります。それを眞向に斬ると、爆薬の狼煙が轟きます。舟止の合圖だ。とたんに片わきの下座からは、俄かに大ばやしがり起つて、頓兵衛は狂亂の様となり、落人の詮議にかけつける。

と云ふのは花道を飛六法で引込むのです。如何に完全な稀れに見る象形だらう。どんなに早く喘ぎ駈けるよりも早く、大事件で、激情があつて、世にも美しい。

○

あとはこの幕を一氣に閉める大段落の結末です。すべて單時間に小さからぬ事件が次ぎ次ぎと起るが、それを少しも危げなく、運びを肯定して持つて行くのは、強い形美の移動です。まなく時間が充されてゐるからです。

頓兵衛は義峰を引つとらへに行つたが、舞臺にはやぐらに太鼓が吊つてある。と、云ふのはそれを打てば落人は捕まつたといふ八方への知らせになる——即ちそのやぐらのそばにはお舟が傷付いて一人残つてゐる。彼女はよろめき乍らやぐらに登つて精一杯太鼓を打つ。正にそれはお舟の打つ可き太鼓に出來てゐるから、其音は舞臺をよく締めてたのもしく響きます。と、六藏が船頭

姿で三度あらはれて来て、お舟に太鼓を打たせまいとからんで邪魔をする。バチをうばつて投げ
 る。と六藏の刀のさやがお舟の手にかゝる。六藏は中身を抜く。即ちさやを持つてお舟は太鼓を
 打つ……そのうち何かの拍子で六藏はお舟に刀をとられ、それで脾腹を刺されて、やぐらを落ち、
 息絶えてしまひます。

と、太鼓の音をきいてやぐらの前の川中を頓兵衛が舟をこぎもどしてやつて来る。そこまで来
 ると、どこからか——義峰はまだその近くにゐる筈だ。或ひはその味方の者が何所にどうゐるか
 も知らない。現に見物の中に何人あるか知らない。——矢が飛んで来て、いきなり頓兵衛ののど
 笛にぐさとさゝり、彼は舟中に虚空を掴んで死にます。その時やぐらの上ではお舟が哀れに死に、
 かくてこの大事件は終り、ホツとして幕になる……。

大正十二年三月中旬。(十三年四月號、新講義)

夢 想 語

——歌舞伎劇への道——

一

今月〇氏が來られて、正月號の誌上へ、「歌舞伎劇に就ての希望なり要求」を書く様にとのこと
 です。然し私は時に歌舞伎劇の、それを喜んで見てゐる見物でこそあれ、それ以上には何者でも
 ない、素人ですから、希望だの要求だのと云ふ別にまとまつた考へはさし當り有りません。即ち
 よし書いてもその道の人にそれを示して、参考になる様な實際的のことは、思ひ當りません。悉
 く云つても云はないに劣る位るの餘計のことしか記せません。が、たゞ、不取敢その範圍でなら
 ば、「もしかうもあつたら」と、素人の尻馬の工合に、思ふことはある。つまりそれなら書けます。
 で、どうせ初めからさう云ふわけで、之れは題立たずの一つの原稿です。全く「一つ」の机上原

稿」です。こんなことを思つてゐる人もあるのか、とたゞ、その道の人に思はず、然し結局それつきりの一つの閑人語です。――

書いてだけおきませう。「思ふ」だけは兎に角附焼刃ではありませんから。どうでもよく読みすてよ下さい。

と云ふのは、どうせ云つても出来ない相談の夢ものがたりですから。

筆が遊りますが、――私は「芝居國」にかねて一つの夢想を持つてゐます。それは、先づその夢想の根は、何れ段々に時がたつにつれて、歌舞伎劇らしい歌舞伎劇は漸次に無くなるだらう、と思ふことから來ます。いづれその「原因」の様なもの、數へれば澤山にある。然し云つても小うるさだけでつまりませんし、所詮今の時勢故わり切つたことでもある。それは以心傳心として唯考への先きだけ書くに止どめますが、どうも私は思ふ。きつともう十年乃至二十年もすると、歌舞伎劇の歌舞伎劇らしさは、「芝居」から無くなつて了ふだらう。と、悲觀の方へ考へます。今からそれが隆盛に向ふ、と、樂觀の方へは考へられません。

即ちもしもこの「悲觀」が幸幸にして事情の大勢には當つてゐないならば、然し又私の「夢想」も夢想ではなく、すつと現實性を帯びて、もうそろ／＼そのかたちが現はれかけてもよささうに

思ふのだが、かねて成行を成行に任せて見てゐるに、さう云ふ氣合ひはとんとなささうです。反對にその逆の氣合ひは益々ありさうです。それで、「悲觀」をしてゐます。悲觀を肯定して、あきらめてゐます。

私は實は何にでもさうです。「思想」にし對しても、「風俗」に對しても「趣好」に對しても、「社會」に對しても、……およそ「美」に關することではひろく今後の日本に對して、先づ概略悲觀してゐます。樂觀は極く／＼ほつちりです。と云ふのは、さし當りその「悲觀する者」それ自身がせめて身を以て美を支へる他には、大勢はたふ／＼として美もへちまも無い方角へ行く他には、近來日本の成行は納まるまいと、危なく思ふ。どうせ芝居の方へもその洪水はおしよせませう。

もし押しよせなければ不思議な例外でせう、と思ふ。――そんな場合は先づ有りさうにない。更に實は、何れ僕等がなくなる二十二三世紀の頃には、否、多分もつと早く、どうも思ふに、日本はかなり大出鱈目になりさうな豫感がします。先づ大體、萬事萬端が、アメリカの様へつぽこになつて了ふだらう、と思はれてなりません。

それで、せめていゝのは、「今」のうちかと思ふ。「今」のうちのデケーが、然しせめていゝので、そのデケーの汎勢の一隅には然し「今」――辛うじて二十世紀――には、猶、確たる審美はある

ことだらうと感じる。その後は近來の大勢で行くと、日本は大なだれにくづれはしないか、危ふきことに思つてゐます。

東京中京橋の様になり、女は髪を切り、男は既製品になり、その他、その他、どうしてその大勢の中に、芝居のみがしつかり立つて行けやうか——多分跡方もなく伎道はすたれて了ふこと
でせう。で、怪し氣な變なものが榮えることだらうと思ふ。

屢々火を見るよりも明らかにその有様を「観じる」ので、いゝ心持ではありません。で、せめて、「今」その「美」のまだなくならぬ間に、見ておきたいと思ふ。「思ふ」のはそれだけです。さう思はず影の「思想」は、それは心へ根が深く、容易くは動かないので、それで私は「あきらめてゐる」と書きました。

何故ならあきらめずに歎いても今更及ばない。寧ろあきらめて、然しあきらめる「彼」その人に於ては當分出来るだけ積極的に「美」の中につかる工夫をめぐらすほか、伶俐な立場はなさ相に思ふ。——私はその主義である。歌舞伎劇も何れはなくなる他には行き様のない、危ない軌道を通つてゐる。さうとしか思へない。
で、如何すればいゝか。

二

それから先きに云つた「夢想」ですが、この夢想も實は私に於ては實情だ。然しこんなことを書いて、誰がそれを今時「實情」にてらして讀んでくれるだらう。張り合ひのないことです。それで、かいてもかゝなくても、初まらぬ。能なき戯言に自分自ら思つて、つまらないのだが。——

かねて私は人づてに聞いた計劃に、耳食だから眞爲はわかりませんが、何年か前に或る株式が何かとあつて、兩國橋の向ふへ江東座とか何とか云ふのを建て、凡て古式で歌舞伎劇を演ずる……と云ふことを聞いたことがあります。現にその建物のあとも、廢墟か何かの様に、その後ほつたらかして兩國向ふに立ちぐされてゐる。

それは何れそれを建てる趣旨なりもくろみがかかり、「遊び」で初まつたので、結局、資金の行きつまりか何か、現實曝露が起つて、行きなやみになつたのだと思ふ。止むなき成行と思はれます。——就ては、私が思ふのは、今後は一つそこをもつと本氣で、つまり美を惜しむ心で、何とか

それが形ちとなつて改めて一つの「江東座」が出来るといふと思ふのです。で、そこでは、強ち「古劇」を古式にやる必要などはない。せめて歌舞伎劇を歌伎舞らしくやればいい。無論電燈をよして蠟燭にすると云ふ様なことではなくとも、せめて今の新富座風でいふ、あの程度のもので、せめてその役者、太夫、幕内などの人は勿論のこと、道具方も、いろ／＼影で必要の事をする然し小役の人も、無論ツケを打つ様な人も、ちゃんとそれぞれの道——それには年期や苦勞が並々でなく要るのです——の仕事で、生活の立つやう、何か今後當分にかけて安心のある仕組みが立つといふ。で、つまりさう云ふ所謂「芝居國」が一つ何かの方法で世間の風以外に吹かれて、あるといふと思ふ。

そろ／＼そんなことに氣運が向いて來ると先づよからうと思ふ。今の能の方は、若しや既にさう云ふ様な工合ではないかしらん。(文樂などは是非さうでなければもう無くなる)芝居も何れはさうなるのがよからうと思ふのです。

一般の中において先づ當分繁榮なのは差し當りよからうが、その間に本根の方が次第に腐つて來ては、あとでつぶしがきくまいと思ふ。松助氏や中車氏や何か、清榮のうちには先づいゝが、縁起でもない事を云つて氣にさはられては困る、然し實情だから云ふ。もしも何かしらで早い話が

段四郎氏の様なことになり、あとには新知識の人がのこる。——「新知識」はいゝことだが、その知識なら、持つて居る人間は澤山あるだらう。段四郎氏の藝に至つては、持つてゐる人は世に一人しかないのだ。せめて、つまり今云つた様な「江東座」範圍の世界の中で、成る可く今の又五郎の様なかしい子は中車氏の様な確かな人が、みつしりしこむといふと思ふのです。フラフラ出歩かせて寫眞をうつしたり變なものに凝つたりさせてゐる間は、大方あるまいと思ふ。殊に今の世情の風は極くわるいだらう。

——と云ふ、大體さう云ふ夢想です。

だから、云へども實現されつこはないと豫め云ひました。重ねて、それが時勢だとも敢て云ふ。結局どうでもいゝ。惜しいが仕様あるまい。

即ちその「どうでもいゝ」現實に對しては、今のまゝで別段希望も要求もありません。せめて今の様に五幕のうち一つでも、歌舞伎劇場で歌舞伎劇の見られるのは、非常にいゝことです。寧ろ喜んでゐます。もし見られないとしても、その方が寧ろ今の時勢のさなかでは、當然なのだから、そこから云ふと、建築、風俗、などに比しては、芝居はまだいゝ方でせう。少くも私は満足です。

たゞ然しもう今後歌舞伎十八番は出さないと云ふ様なことだか、あゝ云ふことはもう少し折れ合つたらよからうと思ふ。それでなくとも、何れはやらうとしてもやれない時節は段々に來るのだから。惜しいことではないか。……然しこれもどうでも仕様ありません。

で、私は當分注文もへちまもなしに、たゞいゝ狂言だけ見る氣になるのです。何ほ今になくならんと云つてもさう速急のわけではなからうから、——その他、別に何の思ふことも心付きません。

○
この私の夢想は、殊に「今」は芝居の危ふい隆盛期だから、夢想の寂しい緊縮策は、笑はれはすれ、容れられつこないこと、極めて自明です。然し警告だけするが、ものは崩れる時には隆盛のほんの毛程の一步からだ。その一步がどの若い俳優の足元ないと云へるか。危ないことである。——或ひは何れその「機」が來ると云はずとも、一つの「江東座」は出來る段取りになることもあるかも知れぬ。歌舞伎劇は所詮日本の傳統にてらしみて、愛されてゐるから、さう云ふ様な時には、もし僕は不思議なカネモチにでもなつてゐたら喜んで無限責任の株主になりませう。……どうも他愛ない夢ものがたりの氣がします。まじめでは云つてゐるのだけれど。以上、乞判断。

大正十一年十二月八日記。(十二年一月號、新演藝)

大正十三年六月二十日印刷		1-1.300
大正十三年六月廿五日發行		〔定價二圓〕
清	著者	木村 莊 八
談	發行兼印刷者	長島 豊太郎
	印刷所	曠野社印刷所
發行所	東京市豊島區長崎村一六二 新しき村出版部	
	電話東京 五二五四七 電話小石川 七〇九九	

木村莊八

小品集

「人類の本」第五。
價 壹圓、送料八錢



猫

猫好きの著者が其愛猫達の生活を描いた「猫」に始まつて、底抜けに自由な交遊を記録した「遊ぶ會」に終る。七篇、美と、味と、藝樂との結晶である

新しき村出版部

東京落合局区内長崎村
振替東京五二五四七番

525
198

終

